

受験番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四十点)

この部分は、著作権の関係で
掲載出来ません。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四十点)

受験番号

この部分は、著作権の関係で
掲載出来ません。

受験番号

問1 線部a、b、cの品詞をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 形容詞 イ 形容動詞 ウ 副詞 エ 連体詞 オ 助動詞

問2 線部A「腑に落ちない」B「所作」の文中における意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

A ア 信頼できない イ 納得がいかない ウ 機嫌がよくない エ 賛成できない
B ア 振る舞い イ 顔つき ウ 言葉づかい エ 作品

A
B

問3 電光石火 イ 晴耕雨読 ウ 諸行無常 エ 森羅万象

--

問4 線部①「僕は背筋がぐっと伸びた」とあるが、このときの青山について説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 懸命に墨をする自分を放っておいて、居眠りをしていた湖山先生の態度に不満を覚え、文句を言おうと意気込んでいた。
イ 自分が墨をする間に居眠りをしていて湖山先生が、名人にふさわしい真剣な面持ちになったのを見て、圧倒されている。
ウ ようやく墨をすり終え、居眠りから覚めた湖山先生が近づいてきたことで、いよいよ指導が始まるのだと緊張している。
エ 墨をすることを命じたとき、居眠りを続けていた湖山先生に、その真意をきちんと問いただそうと気を引き締めている。

--

問5 線部②「湖山先生は衝撃的な一言を、僕に告げた」とあるが、どうい点が「衝撃的」なのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア せっかくなすった墨を、いくつもの絵を描くことであつという間に使い果たし、何を教えるでもなく再び同じ作業を命じた点。
イ まじめにすった墨を使って、神業としか思えない筆の動きを披露しつつ、青山に足りないものを遠回しに伝えようとした点。
ウ 時間をかけてすった墨を、目にも止まらぬもの凄く速く使いつつ、満足せずにさらに描き続けようとする点。
エ 心を込めてすった墨によって、手本としての風景画を多く描き、次は君が描く番だと言わんばかりに墨をするよう告げた点。

--

問6 線部③「これでいい」について、
(1)「これ」とは何か。文中から十字以内で抜き出しなさい。

--

(2) 湖山先生はこの言葉を通して、墨のすり方に関してどのようなことを教えようとしているのか。三十五字以内で答えなさい。

--

問7 線部④「とたんに僕は恥ずかしくなった」とあるが、青山がそのように感じた理由として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 湖山先生の絵が墨の粒子の違いで劇的に素晴らしくなったのを見て、自分が先生の力量を見誤っていたことを理解したから。
イ 湖山先生は絵を描いて見せるだけだったが、そこに水墨画の秘技を伝えようとする意図が隠れていたのだと思いついたから。
ウ 湖山先生のような偉大な名人に、自分が下手にすった墨のせいであつたらぬ絵を描かせてしまったのだと分かったから。
エ 湖山先生が新たに描いた絵がこれまでとまったく違うことに驚く一方、自分の墨のすり方が誤っていたことに気づいたから。

--

問8 線部⑤「水墨画は孤独な絵画ではない」とあるが、そのように言う理由として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 水墨画とは、独りきりで描こうとする気持ちの強張りを解きほぐし、周りの人に心を開くことで完成するものであるから。
イ 水墨画とは、自然と深く関わり合っている自分の存在に意識を向けつつ、その関わりと一つになって描くものであるから。
ウ 水墨画とは、豊かな自然を対象にしながら、深い絆で結ばれた師と弟子が互いに高め合うことで磨かれるものであるから。
エ 水墨画とは、自分の殻に閉じこもることなく、周囲の自然に感謝の気持ちを抱くことによって極められるものであるから。

--

問9 線部⑥「その壁の向こう側の景色を、僕は眺めようとしていた」とあるが、このときの青山の説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア これまでには心に従って描こうとしていたが、湖山先生の姿勢に学んで、もつと自然を観察しようと考えようになっている。
イ これまでには真つすぐに生きることにこだわっていたが、湖山先生の言葉を受けて、ありのままの自分を受け入れ始めている。
ウ これまでには水墨画を自分とは縁のないものだと思っていたが、湖山先生の教えにより、次第に興味を抱くようになっていく。
エ これまでには心を閉ざした孤独な状態であったが、湖山先生の導きによって、少しずつ自然との繋がりに目を向け始めている。

--

受験番号

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(二十点)

白河院の御時、^{※1}九重の塔の金物を、牛の皮にて作れりといふこと、^{※2}世に聞えて、修理したる人、^{※3}定綱朝臣、^{※4}ことにあふべき由、聞えたり。仏師なにがしといふもの召して、「たしかに、^①まこと、^②そらごとを見て、^{※5}ありのままに奏せよ」と仰せられければ、承りて、上りけるを、^{※5}なからのほどより、^{※6}涙を流して、色を失ひて、「身のあればこそ、^③君にも仕へ奉れ。肝心失せて、^④黒白見分くべき心地も侍らず」といひもやらず、^④わななきけり。君、聞こしめして、^⑤笑はせ給ひて、^{※8}ことなる沙汰なくて、^⑦やみにけり。^{※9}時人、^{※10}いみじきをこのためしにいひけるを、^{※11}顕隆卿聞きて、「^⑥こやつは必ず^{※12}冥加あるべきものなり。人の罪蒙るべきことの、罪を知りて、みづから、^⑧をこのものとなれる、^⑧やんごとなき思ひはかりなり」とぞほめられける。^⑨まことに久しく君に仕へ奉りて、^{※13}ことなかりけり。

『十訓抄』

- ※1 九重の塔の金物：京都にある法勝寺の九重塔の頂上にある金属の飾り
- ※2 世に聞えて：噂が流れて
- ※3 ことにあふべき由：処罰されるという話
- ※4 奏せよ：申し上げよ
- ※5 なからのほど：半分ほど
- ※6 色を失ひ：顔色も失せて
- ※7 いひもやらず、わななきけり：言いきることもできず、体がガタガタ震えた
- ※8 ことなる沙汰なくて：これといった処分もなく
- ※9 時人：その当時の人々
- ※10 いみじきをこのためし：たいそう愚か者の例
- ※11 顕隆卿：白河院の近臣として力をふるった人物
- ※12 冥加：神仏が守り助けること
- ※13 ことなかりけり：無事であった

問1 線部①「召し」⑨「仕へ」の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 白河院(君) イ 修理したる人(定綱朝臣) ウ 仏師なにがしといふもの エ 時人 オ 顕隆卿

問2 線部②「まこと、そらごと」とは「真偽」という意味である。

(1) これと同じ意味で用いられた言葉を文中から抜き出しなさい。

--

(2) ということについての真偽なのか。二十五字以内で答えなさい。

問3 線部③「肝心失せて」とは「氣力を失って」という意味である。仏師はどういうことに対して氣力を失ったと言おうとしているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 九重の塔の金物が、想像以上にひどい直し方だったこと。
イ 九重の塔に半分ほど登ってみると、あまりに高すぎたこと。
ウ 間近に見た九重の塔の金物が、とても立派だったこと。
エ 九重の塔の金物の真偽を見抜く眼力のなさに気付いたこと。

--

問4 線部④「わななきけり」とあるが、当時の人々はこの仏師の話を聞いてどのように考えたのか。文中から十字で抜き出しなさい。

問5 線部⑤「笑はせ給ひて」とは「笑いなさって」という意味であるが、白河院はなぜ笑ったのか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 真偽を見分けて伝えるように命令したのに、震えながらできなかった理由を必死に話す仏師のことが滑稽だったから。
イ 無理難題を押し付けていただけなのに、本気にした仏師が実際に九重の塔に登っていたと知っておもしろかったから。
ウ 九重の塔に登るように仏師一人に密かに指示していたのに、みんなの前で泣きながら騒ぎたててしまいあきれたから。
エ 自分の命令を自信満々に引き受けたのに、実際には九重の塔に登ることすらできなかった仏師を情けなく思ったから。

--

問6 線部⑥「こやつ」⑦「人」はそれぞれ誰のことか。問1の選択肢の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

⑥	
⑦	

問7 線部⑧「やんごとなき思ひはかりなり」とは「実に素晴らしい配慮だ」という意味であるが、ということが素晴らしいのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 定綱朝臣を救うために愚かな行動をした仏師に対して、白河院が処罰するのをやめたこと。
イ 懸命に無実を訴える仏師に感動して、白河院が定綱朝臣と仏師のことを許したということ。
ウ 仏師が臆病なふりをする事によって、定綱朝臣が罪に問われないようにしたこと。
エ 仏師が自分の出世のために、定綱朝臣の話を引き合いに出し上手く利用したこと。

--

問8 本文の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 白河院は仏師に九重の塔のどこを修理したのかくわしく説明するように言った。
イ 仏師は自分の身の安全を第一に考えて、九重の塔に登ったとうそをついた。
ウ 白河院は涙ながらに定綱朝臣の無実を訴える仏師に感動して処罰しなかった。
エ 顕隆卿の言う通り、仏師は神仏の守護を受けて平穩に暮らすことができた。

--